

# 看護基礎教育における 看護研究計画書作成の効果的な指導方法の検討 ～ラベルワーク技法と演習展開方法の観点から～

高橋恵美子・梶谷みゆき・石橋 照子・長島 玲子  
松岡 文子・井上 千晶・渡部 真紀

## 概 要

看護基礎教育における「看護研究の基礎演習」において、ラベルワーク技法を用いた看護研究計画書作成の指導を展開している。今回は、ラベルワーク技法の指導を含めて看護基礎教育における看護研究計画書作成の効果的な指導方法を明らかにすることを目的に、担当教員から指導に関する工夫と成果・困難点を求めKJ法で分析した。その結果、学生への指導のポイントとして、学生の〈論理的思考力〉〈段取り力〉〈コミットメント力〉の3つの力を育てることへの働きかけが必要であること、また教員側の力としては、〈教員の指導力〉と〈物理的環境の整備〉が必要であることが抽出できた。

キーワード：看護研究計画書，教育方法，看護基礎教育，ラベルワーク技法

## I. はじめに

研究計画書は、研究の目的と研究方法を周到に具体化して、誰にでも分かるように書式化したものであり、いわば研究の「見取り図」にあたるものである（近藤，1992）。研究の一貫性やオリジナリティを保証してくれ、研究の良否に関わる重要な部分である。しかし、看護研究計画書作成のプロセスは、具体的事象を抽象度を上げて説明したり、思考を拡大したり集束をかけたりしていくことの連続である。そのため臨床の看護師であっても、研究計画書作成には困難を伴うことが多い。ましてや臨床経験の乏しい看護基礎教育課程の学生においては、研究計画書作成の学習は、より高度な学習であり、教員はその指導に苦慮をすることが多い。研究計画書作成段階の思考の連続を、可視化することにより、スムーズに研究計画書作成を進めることができると考え、我々は平成19年度から本学3年次の看護研究の基礎演習において、ラベルワーク技法を用いて研究計画書作成を指導し

てきた。

本方法の評価として、「ラベルは意見・思考を共有しやすい」「ラベルは意見交換を促進する」「ラベルワークは思考の整理につながる」「図解をすることで思考を蓄積しつつ全体像をつかめる」などの利点が明らかになっている。一方では、「タイムリーにアドバイスしていくこと」「要所を押さえてサポートしていくこと」「学生のやる気を引き出すコーチング力」など教員に求める要件、学びを促進する方法の要件も明らかになっている（石橋，2008）。この評価を踏まえ、今年度は教員の効果的な指導方法について検討した。その際、ラベルワーク技法は看護研究計画書作成のための一つの道具であることを考え、効果的な指導を明らかにするにあたり、ラベルワーク技法に特化することは意義が薄いと考え、ラベルワーク技法も含めて看護基礎教育における看護研究計画書作成の効果的な指導方法を明らかにすることを研究の目的とした。

## Ⅱ. ラベルワーク技法を用いた 看護研究計画書作成の進め方

看護研究の基礎演習は、本学3年次生前期1単位30時間の科目である。看護学科看護系教員12名で担当している。教員1名あたり学生6～7名の少人数学習である。

ラベルワーク技法を用いた看護研究計画書作成の進め方には5つのステップがある。ステップ1：問題を明らかにする段階、ステップ2：知見を整理する段階、ステップ3：研究目的・方法を明らかにする段階、ステップ4：研究計画書作成段階、ステップ5：意見交換会である(石橋, 2008)。ステップ3まではラベルを使いながら図解を作り上げていき、ステップ4は図解を元に研究計画書を作成する。ステップ5は研究者が担当する学生全員で、発表および意見交換をする(表1)。

研究者は、演習開始前に全員で、演習の日程、全体計画、役割を打ち合わせた。

## Ⅲ. 研究方法

### 1. 研究参加者

3年次生の「看護研究の基礎演習」の科目において、ラベルワーク技法を用いた看護研究計画書作成方法を実施した科目担当教員4名(教授2名, 准教授1名, 講師1名)と演習に参加した助手3名の計7名である。

### 2. データ収集方法

研究参加者に対し、以下の4項目について、自分の実践および感じていることすべてをカードに記入し提出してもらった。項目は、①指導にあたり工夫した点、②工夫してよかった点、③こうすればよかったと思う改善点、④指導が難しいと感じている点である。記述されたカー

表1 看護研究基礎演習 意見交換会プログラム

目的: グループで検討してきた研究の構想を、発表し意見交換をすることで、自分たちの疑問点や困った点を解決したり、新しい気づきを得ることで、研究計画をより精度の高いものとする。				
方法: ・各グループが図解を用いながら、自分たちの疑問をどのように発展させ精選し、研究目的に至ったのかを発表する。迷っていること等あれば、検討して欲しいこととして提案する。 ・参加者は、発表を聞き疑問点やよいと思った点について意見を述べたり、より良い方法について提案する。また、発表者から提案された検討事項について意見を述べる。 ・予め配布資料を読んで質問等を考えてくる。				
日程と役割: 平成21年 8月 6日 9:00～12:10				
時 間	発表グループ	司 会	タイムキーパー	発表者
9:00～9:40	老年 グループ発表	( )	( )	( )
9:43～10:23	母性 グループ発表	( )	( )	( )
休 憩				
10:30～11:10	小児 グループ発表	( )	( )	( )
11:13～11:53	精神 グループ発表	( )	( )	( )
11:53～12:10	グループ毎に今後の予定を立てる			
* 1グループ発表の時間配 40分 : 発表 20分 質疑応答 20分				
* 発表に当たっての資料準備 プレゼン資料 : 図解 配布資料 : 研究計画書 印刷部数 35部 7/31㍻切 縮小図解 (学生28名+教員7名+予備2)				

ドをデータとする。

### 3. データ分析方法

分析には、KJ法を用いた。「基礎看護教育における看護研究計画書作成の効果的な指導方法を明らかにする」ことが研究目的であることを鑑み、研究参加者がそれぞれの経験に基づいて記述したカードを丁寧に整えていく方法として、質的データの統合と分析に優れた本法が適していると考えたためである。

#### 1) データの単位化

研究参加者に対し、カード一枚に一義となるよう記述を求めた。

#### 2) データの統合化

研究参加者から提出されたすべてのカードを、研究参加者に均等に分配した。カードを一枚ずつ順に読み上げながらメンバーの合意の元に、カードが示す意味内容の類似性に着目しながらグループ化していった。カードの意味内容を丁寧に分析するために、一つのグループは、カード3枚程度を基準としてグループ化した。

グループには、そのグループを構成するカードがもつ意味内容を集約した「表札」をつけた。「表札」として、内容を最も端的に要約した一文をつけるようにした。

#### 3) データの構造化

統合化により抽出した「表札」を、「看護基礎教育においてラベルワーク技法を用いた看護研究計画書作成方法の効果的な指導方法とは」というテーマで、内容相互の関係性を考えながら模造紙に空間配置し図解化した。

### 4. 倫理的配慮

研究参加者は本研究者および共同研究者である。看護研究の基礎演習においてラベルワーク技法を取り入れて指導した教員に対し、事前に研究の目的と方法、プライバシーの保護について説明し、研究参加の意思を確認した。その際、研究参加者の自由意思を尊重した。

分析する際に、カードが示す内容を正しく共有するため、カード記入の際は氏名を記述するが、カードの集約が終了し図解が完成した時点で無記名化した。

データは、USBメモリに入力し、鍵のかかる場所に保管し、必要時確認できるように保存する。結果を論文にまとめた後、責任を持って

破棄する。

## IV. 結果

### 1. データの数

参加者7名から4項目について抽出したカード総数は69枚であった。

### 2. データの統合化

69枚のカードは45の小グループに分かれ、さらにグループ化を進めて、16の中グループに集約できた。

### 3. データの構造化

16のグループは、大きく5つのカテゴリーに集約し、図1のように構造化した。

### 4. 構造の叙述化

分析の結果である図1の全体的な流れについて、表札内容、カテゴリー名を用いて説明する。なお、小グループの表札内容は「**]**」、中グループの表札内容は「**【**」、カテゴリー名は「**<**」を用いて表す。

図1は、学生の課題解決力をコマに例えた図である。課題解決力の育成には、学生の「論理的思考力」「段取り力」「コミットメント力」の3つの力を育てる指導が必要であり、コマをまわす力となるのが「教員の指導力」であり、コマを安定してまわすために「物理的環境の整備」が必要であることを示している。図解を構成する5つのカテゴリーについて、それぞれの内容を説明する。

#### 1) 「論理的思考力」について

教員は、学生の「研究に取り組む基礎的能力の不足」を感じており、そのため演習の中で、「【思考の言語化と共有の促進】【講義で得た知識と演習をつなぐ支援】が必要であると感じていた。具体的な関わりとしては、「学生の着眼に意味づけをする」「思考の言語化と整理への支援」などがあり、それらの支援により、「学生は自分自身の考えに気づけた」と感じていた。

また教員は、学生は「実践経験の乏しさ」から研究テーマにしようとしている事象について、具体的にイメージできない現状があると感じていた。そのため「研究テーマや対象を具体化するための工夫」をすることで、「対象の理解や関心を高める」と感じていた。

# 教員の指導力を高め3側面へ指導することが 学生の課題解決力のコマを回す

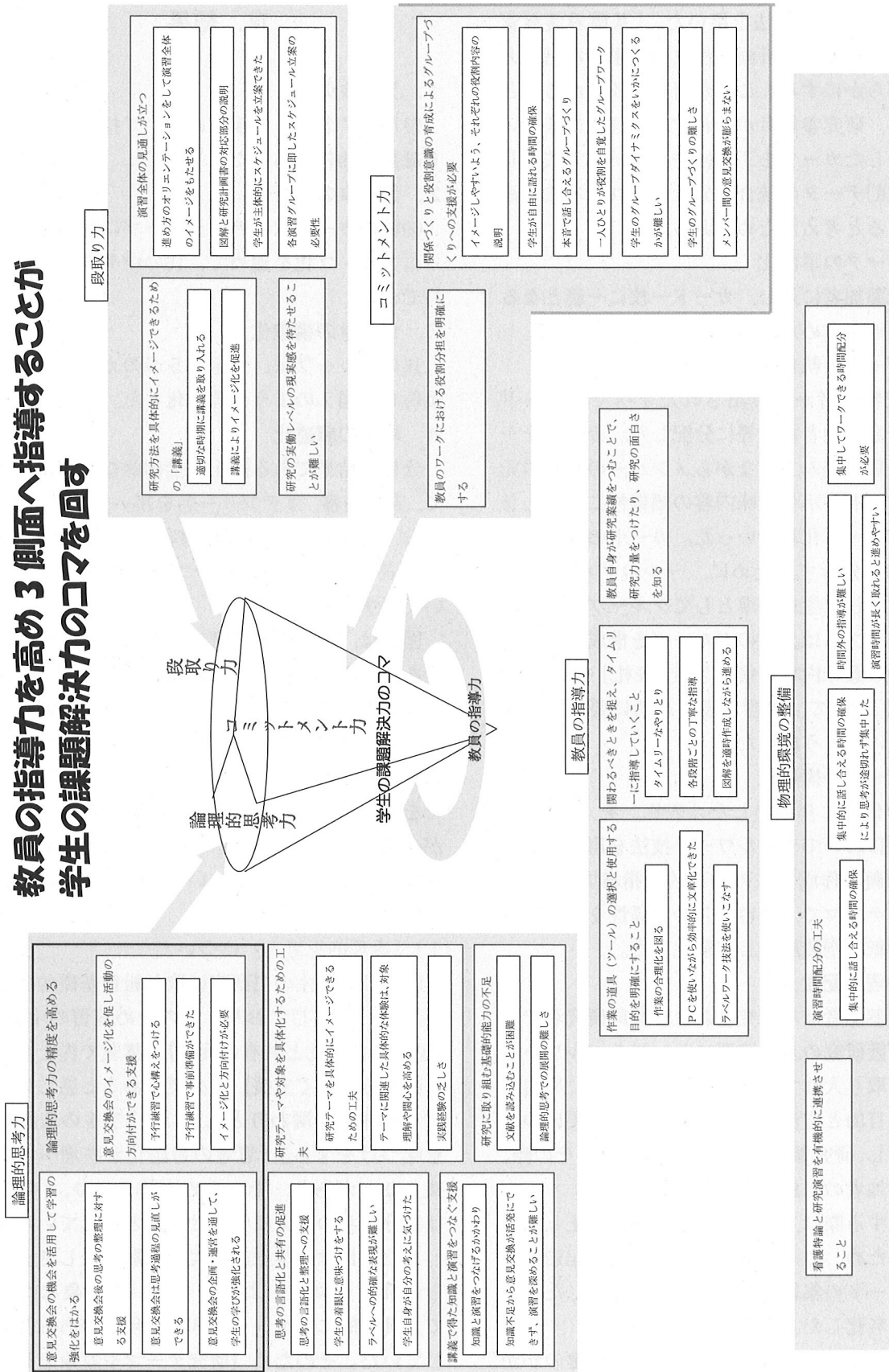


図1 看護基礎教育における看護研究計画書作成の効果的な指導方法とは

さらに、意見交換会を有効に活用するために、【意見交換会のイメージ化を促し活動の方向付けができる支援】と【意見交換会の機会を活用して学習の強化をはかる】をすることで、「思考過程の見直しができる」「予行練習で事前準備ができる」などの良い点を挙げており、思考の精度を高めるのに有効であると感じていた。これらの6つの中グループは〈論理的思考力〉を育てる関わりとしてカテゴリー化した。

#### 2) 〈段取り力〉について

看護研究演習は、研究計画書作成までを目標としているために、教員は学生に【研究の実働レベルの現実感を持たせることが難しい】と感じていた。そのため、演習の中で適切な時期に【研究方法を具体的にイメージできるための「講義」】をしたり【演習全体の見通しが立つ】ように「進め方のオリエンテーションをして演習全体のイメージを持たせる」、「各演習グループに即したスケジュールの立案」をすることが必要であると感じていた。それにより、学生が主体的に演習を進めていくことができると考えられた。よって、この2つの中グループは学生が看護研究演習の手順や組み立ての仕方を自分たちで進めていくための力としての〈段取り力〉を育てる関わりとしてカテゴリー化した。

#### 3) 〈コミットメント力〉について

教員は、「学生のグループダイナミクスをいかに作るかが難しい」あるいは「グループづくりの難しさ」を感じていた。そのために【関係づくりと役割意識の育成によるグループづくりへの支援】をしっかりとすることが重要であると感じていた。具体的には、「役割をイメージしやすいよう、それぞれの役割内容の説明」をしたり、「学生が自由に語る時間を確保」や「本音で話し合えるグループづくり」が重要であると感じていた。また【教員のワークにおける役割分担を明確にする】は、教員自身もグループワークにうまく関わるための大切なこととして感じていた。これらの2つの中グループは、学生と教員がグループワークにしっかり介入するための力〈コミットメント力〉を育てる関わりとしてカテゴリー化した。

#### 4) 〈教員の指導力〉について

【関わるべきときを捉え、タイムリーに指導

していくこと】と【作業の道具（ツール）の選択と使用する目的を明確にすること】と【教員自身が研究業績をつむことで、研究力量をつけたり、研究のおもしろさを知る】の3つの中グループは、その具体的な内容として、「各段階ごとの丁寧な指導」、「図解を適時作成しながら進める」、「ラベルワーク技法を使いこなす」などが含まれていた。これらは、教員が学生に指導するにあたり、教員の資質として必要とされることや、指導の技術であることから、〈教員の指導力〉とカテゴリー化した。

#### 5) 〈物理的環境の整備〉について

【演習時間配分の工夫】と【看護特論と研究演習を有機的に連携させること】の2つの中グループは、看護研究演習を効果的に進めるための環境調整であり、それも教員の指導を効果的に行うための大切な要素として、〈物理的環境の調整〉としてカテゴリー化した。看護研究の基礎演習は、1単位30時間の科目であり、一週間に一コマ（90分）の授業である。教員は「集中してワークできる時間配分が必要」と感じており、実際に集中的に時間確保した教員から、「集中的に話し合える時間の確保により思考が途切れずに集中した」という効果が出た。

看護研究の基礎演習の授業の目的は、学生の課題解決能力の育成にある。今回、効果的な指導方法について検討した結果、課題解決力を高めるための学生側の3つの側面と教員の指導力と物理的環境の調整が導き出された。

## V. 考察

図解化した結果から導かれた、学生側の3側面、教員の指導力、物理的環境の調整に沿って考察する。

### 1. 学生側の3側面

教員は、看護研究計画書作成の指導にあたり、以下の3点にポイントをおいて指導していることが明らかになった。1点目は論理的思考力の育成、2点目は段取り力の育成、3点目はコミットメント力の育成である。

1点目の論理的思考力について、教員は2年次までの学習では、学生は文献を読み込む力や論理的思考力が十分ではないと感じていた。看

護研究計画書作成のプロセスでは、文献を読み込んだり、論理的に思考を展開していく力が求められる。我々は、研究計画書作成に必要な基礎的能力が十分でない学生であっても、思考しやすいように、そのプロセスを可視化し思考をスムーズにしてくれる方法として、ラベルワーク技法を使用している。しかし、研究計画書作成において初学者である学生は、ラベルワーク技法を用いても、思考の整理がスムーズに行えないことがある。学生がラベルに自分の考えを記述する際に、教員が思考の言語化を支援したり、学生の着眼を意味付けするような支援をすることで、学生の思考を助け、論理的思考をより促進させることが示唆された。

また、意見交換会はすでにその利点として「自分たちの不十分な点に気づくことができる」「発表会はグループの学びを発展させる」ことが報告されており(石橋, 2008)、今回の研究でも同様な結果が得られた。そして、今回はその意見交換会をより有意義なものにするための教員の指導方法として、意見交換会前後の関わりをしっかりとすることの必要性が明らかになった。

2点目として、教員は学生の段取り力を育てることに指導のポイントをおいていた。課題解決力には、学生が自分たちで主体的に演習を進めていけるような力が必要である。そのために教員は、物事の手順や展開を組み立てる能力としての段取り力の指導が必要であると感じていた。具体的な方法として、演習全体の見通しが立つようなオリエンテーションをしたり、各演習グループのダイナミクスや学習到達度などを踏まえた個別なスケジュールを立案することにより、現在演習で行ってことが、演習全体の中のどの部分に当たるのかを常に意識させることが重要であると感じていた。

3点目として、教員は学生のコミットメント力を育てることに指導のポイントをおいていた。中村は、効果的なグループ学習の要因には、教員の関わりや環境などがあげられるが、学習の成否に影響する重要な要因として、グループのメンバー編成が考えられる(中村, 2005)と述べている。また古藤は、「基礎・基本の確かな定着」や「発展的学習」による学力向上を狙いとした場合には、到達度や習熟度を基準に「等

質集団」による学習グループの編成が最も効果的である(古藤, 2003)としている。本演習は様々な制約から、学生の学習能力、領域に対する関心度、人間関係など様々な特性をもつ学生が集合してくる。そのため、われわれ教員はグループダイナミクスをいかにつくるかが難しく、グループによっては、メンバー間の意見交換が活発に行えないという現状があった。石橋は「ラベルワーク技法を用いた看護研究デザイン法」の中で、ラベルワーク技法を用いた効果として、グループワークへの参加しやすさをあげている(石橋, 2006)。しかし、石橋らの研究は、精神科看護という同じ領域で同じテーマに関心を持ったメンバーが集まるよう配慮されており「等質集団」といえる。今回のように、授業として編成されたグループの場合は、ラベルワーク技法を使用している場合、グループづくりへの支援が必要と考えられた。またグループづくりのひとつとして、教員間においても、それぞれの役割を明確にしておくことが学生に効果的に働くと考えられた。

## 2. 教員側の要因

正木は、質的統合法(KJ法)を用いた分析では、分析する者の習熟度によって分析結果に相違が見られるとしている(正木, 2008)。そのため、この方法を用いる学生に基礎訓練が必要であると同時に、方法論に長けた学識者によるスーパーバイズが有益である(正木, 2008)としている。我々が用いたラベルワーク技法も、山崎の質的統合法(KJ法)と同じく質的データの統合と分析に優れた方法であると理解している(石橋, 2008)。正木の意見と同様に、研究計画書立案の方法論としてラベルワーク技法を使用する場合、学生がラベルワーク技法について基礎訓練をしていることと、教員がこの方法論について研修を重ね、スーパーバイズできる力量を持つことが重要であると考えられる。

## 3. 物理的要因

ラベルワーク技法を用いた看護研究計画書作成の過程は、さまざまなデータを質的に統合し分析していく過程であり、内包されている関連に基づいて、ラベルが主張する内容を丁寧に整理し本質をつかもうとする方法である。そのため、丁寧に思考する時間的環境を整えるこ

とは必須である。研究指導する中で、教員が時間的制約にジレンマを感じたのも当然といえる。これまでは、担当教員の裁量によって時間的環境の調整を行っているが、今後は看護特論との有機的な連携を考えるなど、カリキュラム全体を見直すことにより、物理的にも質的にも効果的な指導が展開できるものと考え、検討していく必要性を感じた。

## VI. 結論

看護研究の基礎演習において、ラベルワーク技法を用いた看護研究計画書作成の効果的な指導について検討した結果、学生の課題解決力を育てるための指導のポイント3点、教員の指導力を高める方法、物理的環境の調整について明らかにできた。しかし、本研究のデータは限られた研究参加者を対象とした研究であり、その実証性において限界がある。今後は、さらに同様の機会によりデータ収集を続けるとともに、今回明らかになった指導方法を実践し、その効果を検証していきたいと考える。

## 引用文献

- 石橋照子, 長島玲子, 梶谷みゆき, 高橋恵美子, 林健司, 和田由佳 (2008): 看護基礎教育においてラベルワーク技法を用いた看護研究計画書作成方法の評価, 島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要, 2, 81-89.
- 石橋照子, 吾郷美奈恵, 梶谷みゆき, 武智佳子, 高野美喜子, 稲本夏江, 松原峰子, 川原仁美, 三原記子, 山崎祝代, 野津早苗, 児玉美由紀 (2006): ラベルワーク技法を用いた看護研究デザイン法, 島根県立看護短期大学紀要, 12, 19-27.
- 古藤康弘 (2003): 少人数指導における個性化・個別化の検討課題-「学びやすさの個人差」を規定においたグループ編成, 教材学研究, 14, 195-198.
- 近藤敬子 (1992): 研究計画書を書くということ, 臨床看護研究の進歩, 4, 182-191.
- 正木治恵 (2008): 看護学研究における質的統合 (KJ法) の位置づけと学問的価値, 看護研究, 41(1), 3-10.
- 正木治恵, 山浦晴男 (2008): 質的統合法 (KJ法) を用いた修士論文指導時の気づき, 看護研究, 41(2), 131-136.
- 中村和代, 石井知子, 牧香里 (2005): グループ編成がグループ学習の参加姿勢に及ぼす影響, 看護教育, 46(3), 232-236.

高橋恵美子・梶谷みゆき・石橋 照子・長島 玲子  
松岡 文子・井上 千晶・渡部 真紀

# Study of Leading for Designing Nursing Research in the Basic Nursing Education

Emiko TAKAHASHI , Miyuki KAJITANI, Teruko ISHIBASHI, Reiko NAGASHIMA  
Ayako MATSUOKA, Chiaki INOUE and Maki WATANABE

Key Words and Phrases : designing nursing research, education technique,  
basic nursing education , label work technique,